中村隆英編

『家計簿からみた近代日本生活史』

東京大学出版会　1993.5　vi＋404ページ

本書は，明治から大正，昭和を通じて記録された25家族の家計簿を集め，分類整理し，それぞれ個別に詳細な分析をしてまとめた大変ユニークな分析資料である．家計簿の多くは20年以上，最高は50年以上も継続して記帳された超ロンジテューディナルなデータである．わが国で家計簿をつけるという習慣が始まったのは明治の中頃だそうであるが，この中の最も古い家計簿は，明治30年から開始されている．

本書が生まれた経緯をみると，編者は，個別家計の記録を通じて日本人の生活の歴史的変化を後づけたいという意図で，新聞紙上を通じて昔からの家計簿の提供を広く呼びかけ，集まった家計簿をお茶の水大学の研究室を中心に，11人の人たちによって分類・整理し，共通のスタイルをさだめて，分担して分析をまとめたものである．

I

本書の構成は，序章「家計簿からみた生活史」と，25の家計(A～Y)の個別の詳細な分析からなる．

序章では，編者が編集の意図と，明治以降の日本人の生活の展望を与えている．編者は個別家計の分析の前提として次の3点を上げている．

(1)家計には，結婚，育児，教育，そして熟年にいたるライフサイクルがある．家計調査の年齢別データによるライフサイクルの分析は平均的な姿であるが，個別家計のデータはありのままを写し出す．(2)家計は，国民経済の動向で左右される．明治・大正時代から，戦中・戦後，そして高度経済成長等の大きな激変が，家計にどう影響を与えたかを反映する．(3)また個別家計の歴史の中には，夫の早逝とか，失業とか，それぞれ大きな事件がある．家計簿は家庭の幸不幸や曲がり角を物語ってくれる．

このような個別家計簿の分析の目的は，時代背景の中でのライフサイクルと家計の節目を描き出して，日本の生活史の基礎資料を提供することにあるとしている．

ついで序章の中では，時代を，I明治・大正・昭和，II昭和戦前期，III戦時・戦後期，IV高度経済成長とその後，の4期に分け，明治から現代にいたる生活と消費の変化の特長を概観して，個別の家計を分析する上での背景を与えている．

次に25の個別家計の分析が時代の順に集録されている．家計簿はそれぞれの流儀で記帳されているので，政府の家計調査と比較可能なように分類され，一定のフォームに整理して分析がなされている．

まず最初に家族の生活史が，創設期：結婚から第1子誕生まで，育児期：第1子の中学卒業まで，教育期：末子の最終学校卒業まで，成熟期：末子の結婚まで，熟年期：その後の時期，の5つに分けて，それぞれの時代における主な出来事を家族の年齢とともに詳細に記述し，これによってあとの家計分析の背景が与えられる．ついで家計簿の記録の状況と，その整理方法の説明があり，データの利用の限界が示される．

家計の内容は，収入，消費支出，税金，貯蓄，資産等について，家族の歴史を追いながら，時代の経済動向と絡ませて記述され，政府統計との比較もなされている．収入は俸給と賞与の関係，財産収入，内職，年金，仕送り等の関係が明らかにされる．消費支出は大分類程度に整理され，家族によってはさらに部分(たとえば服装費)が詳細に分析されている．また，貯蓄，資産形成についても記入がなされている場合は細かく分析されている．

II

家計簿は消費分析の原点である．しかもここに集録された家計簿はいずれも生き生きとしている．それぞれ個別の家計の歴史をたどっても面白いし，また家庭経済学の観点からも，貴重なケーススタディーの資料であろう．各家計はバラエティーに富んでおり，それぞれ家族の特長に合わせて重点を変えて分析されているので，一つ一つを紹介するわけにはいかないが，全体を通した感想と，消費分析の観点からいくつか興味を持った点を挙げておく．

(1)　昔から長期に家計簿をつけているような家計は比較的裕福なものが多く，編者も対象が平均水準以上の家計に偏っている点が問題としているが，かえってそれがこの資料の特長ともいえる．家計調査の発祥は生活保護のような社会政策的な目的から発しており，英国でもまた日本でも，低所得者層の家計を調べることから出発している．従って戦前の

データは主として平均水準以下の労働者の家計が多かった．しかしながら家計の分析は低所得層と同時に，高所得層の分析も重要である．それは高所得層の動きが，将来の社会のリード役をする面があるからである．私も戦後の高所得層の分析をしたことがあるので，戦前における高所得層のデータは大変興味深い．

(2)　明治・大正期の家計データはきわめて少ないので，明治から記帳されたA，B，Cの3例が含まれているのは特に興味深い．周知のように日本の貯蓄率は諸外国に比して極めて高いが，勤倹貯蓄の習慣は明治時代の家計簿にも明瞭に現れている．これらは平均水準以上の家計ではあるが，それを考慮しても平均消費性向は非常に低く，老後の生活設計がしっかりとたてられている．また戦後のぜい沢は耐久消費財からレジャーへと向かうが，戦前の贅沢は衣料品であり，その状況はB家計等で詳しく記述されている．戦前は呉服屋が反物を担いで家庭に注文を取りにきていたが，そういう雰囲気が伝わってくる．

(3)　戦時中から戦後にかけては，政府統計の空白期間である．この資料の中には，戦前から戦中・戦後を通じて連続して記録された家計がいくつか含まれ，空白を埋める貴重な手がかりとなる．戦時中は国債の半強制的な割り当ての状況が詳細に示され(E家計)，生活の窮乏にも関わらず，貯蓄率がきわめて高いのが画かれている．また戦後のタケノコ生活の詳細や，食料の配給の価格と数量を克明に記録した家計も含まれている．

(4)　戦後の家計については政府統計も豊富である．しかし例えば家計調査の世帯主の年齢階級別のデータを時系列的に追ってコーホート分析をしても，個人単位のコーホートとは異なり，世帯構成の変化が不明で分析に限界がある．その点このデータは歴史の変化の上にのったライフサイクルの分析が可能であり，多くの家計については，政府統計の同世代の数値と比較がなされていて興味深い．例えば序章で紹介されているような，個別家計の成長と賃金プロファイルの変化との比較の分析も可能である．また，失業とか，転職とか経験した家計もあり，家計が大きな転機にどう対応したか，というような資料は他ではみられない．

III

本書では，家計を相互に比較しての分析があまりみられない．編者が序章で若干分析されているが，特定のテーマについて家計を横断した分析をすればいろいろ新しい発見がなされるものと思う．例えば，多くの家計について家族の歴史と平均消費性向が結びつけて示されているので，家族を横断的につなぎあわせて見ると，日本の高貯蓄率の要因を探る鍵が潜んでいるかもしれない．また財産形成の過程の分析に対しては，特にロンディテュージナルなデータは有効である．本書の目的が個別家計の分析と資料の提供にあるので，それは読者に任せられているのかもしれない．

ともかく明治から現代まで，長期に継続した家計簿を収集されたことは大変な努力であり，それを一定のフォームに整理して統計的分析が可能となっているのは，生活史の資料としても統計的分析の資料としても，貴重な貢献である．読者はこれらの家計の中から，自分の分析目的に合った家計を抜き出して利用することが可能である．その便宜のために集録された家計の一覧表を載せておく．

集録の家計簿一覧

コード		職業	記帳期間	開始時の夫の年齢	継続年数
I	A	軍人(中将)	M. 30-S. 13	30歳	42年
	B	教員(校長)	M. 43-S. 8	35歳	24年
	C	教員(校長)	M. 42-S. 35	23歳	52年
II	D	会社員	S. 7-S. 45	33歳	39年
	E	教員(校長)	S. 7-S. 60	24歳	54年
	F	会社員大企業	S. 12-S. 61	30歳	50年
	G	医者	S. 12-S. 62	28歳	51年
	H	会社員(役員)	S. 14-H. 3	26歳	53年
	I	教員(→母子)	S. 10-S. 60	35歳	51年
III	J	教員	S. 18-S. 37	37歳	20年
	K	会社員(仕送り)	S. 18-S. 38	53歳	21年
	L	教員	S. 19-S. 30	29歳	12年
	M	開拓農家	S. 25-S. 62	30歳	38年
	N	会社員安定	S. 22-S. 46	32歳	25年
	O	教員(三世代)	S. 24-S. 48	59歳	25年
	P	会社員(転職)	S. 27-S. 58	38歳	32年
IV	Q	会社員	S. 36-S. 60	41歳	25年
	R	会社員	S. 31-S. 62	31歳	32年
	S	会社員(失業)	S. 37-S. 62	33歳	26年
	T	会社員	S. 39-S. 62	26歳	24年
	U	町会議員	S. 39-S. 60	25歳	22年
	V	会社員	S. 42-S. 61	27歳	20年
	W	県庁	S. 51-S. 62	61歳	12年
	X	会社員	S. 43-S. 61	67歳	19年
	Y	農家(三世代)	S. 48-S. 61	49歳	14年

M：明治，S：昭和，H：平成．

［永山貞則］